ペレ・ヨエツ・エル・ギボール・アビ・アド・サル・シャローム

メシアの光に照らされた存在の四つの存在論的次元

著者：Maru 810

序論 — 神秘、召命、そして完成としての存在

人間の存在とは、ただ生まれ、生き、やがて死ぬという事実だけではありません。存在論は、より根本的な問いを立てます。なぜ人間は存在するのか。存在はどこから意味を受け取るのか。人間の生は誰に向かって歩むのか。聖書の光のもとで、人間は命を受け、他者との関係の中に生き、真理を知るよう招かれ、神における命の充満へと導かれます。

イザヤ書9章5–6節（聖書の版によっては9章6–7節）は、一人の幼子が生まれ、一人の子が与えられることを語ります。そのヘブライ語の称号は、פֶּלֶא יוֹעֵץ — ペレ・ヨエツ、אֵל גִּבּוֹר — エル・ギボール、אֲבִי עַד — アビ・アド、שַׂר שָׁלוֹם — サル・シャロームです。キリスト教の解釈では、この預言はイエス・キリストの光のもとで読まれます。本稿は存在論と実存哲学を黙想の手がかりとして用いるもので、新たな教義を定めるものではありません。

I. ペレ・ヨエツ — 驚くべき助言者

「ペレ」は驚異、不思議、驚くべきことを意味し、「ヨエツ」は助言者、導きを与える者に関係します。この称号は、通常の理解を超える知恵として黙想することができます。神秘とは意味がないことではなく、人間の思考が決して尽くすことのできない深さを持つ現実です。

人間はただ生きるだけではありません。自分の生の意味を問い、選択、仕事、苦しみ、人間関係が善へ向かっているかを考えます。知恵とは情報を集めることだけではありません。真理によって自分を正し、行動を形づくることです。

詩編119編105節は、神の言葉を足のともしび、道の光と呼びます。ともしびは未来のすべてを一度に照らすのではなく、次の一歩を照らします。ヨハネ14章6節で、イエスはご自身を道、真理、命と示されます。キリスト教的な読み方では、ペレ・ヨエツは命の道を示す御言葉であるキリストへと私たちを導きます。人間が知恵を求め、真理に選択を照らしてもらうとき、存在は意味を帯びます。

II. エル・ギボール — 力ある神

「エル」は神、「ギボール」は力ある者、強い者、勇士を意味します。神の力は、他者を支配する力と同じではありません。キリスト教的な黙想では、力は真理、正義、愛、救いとの関係で理解されます。

人間には能力がありますが、限界もあります。建設し、創造することはできても、時間、死、苦しみ、他者の自由をすべて支配することはできません。限界を認めることは人間の尊厳を損なうことではなく、真理に近づく一歩です。人間は神ではなく、存在を受け取る被造物です。

勇気とは恐れを感じないことではありません。自分の弱さを知りながら、正しいことを行い続けることです。神の力は、すべての困難がすぐに消えると保証するものではなく、苦しむ人を責めるために用いてはなりません。コリントの信徒への手紙二12章9節で、パウロは弱さの中に現れる神の力を黙想します。キリストの十字架は、支配ではなく愛と自己奉献によって示される力を表します。エル・ギボールは、自分の力を命を守り、仕え、回復するために用いるよう招きます。

III. アビ・アド — とこしえの父

「アビ」は文脈によって「わたしの父」または「父」を意味し、「アド」は永遠、尽きることのない継続を示します。この称号は一般に「とこしえの父」と訳されます。カトリックの信仰において、このメシア的称号は父と子の区別を消し去るものではありません。父と子は神の三つのペルソナのうちの異なるペルソナでありながら、唯一の神です。

人間は自分自身を創造したのではありません。自分の体、時間、言語、家族、世界を、理解する前から受け取っています。古典的キリスト教形而上学では、神は宇宙の中で最も大きな物体ではなく、すべての被造物の存在の根拠です。「父」という呼び名は、起源だけでなく、関係、養い、愛を表します。

人間は関係の中で生きますが、喪失も経験します。永続する愛への希望は悲しみを消し去るのではなく、悲しみを受け止めながら、それが最後の言葉にならないようにします。ヨハネ17章3節で、イエスは永遠の命を、唯一のまことの神と、神が遣わされたイエス・キリストを知ることに結びつけます。11節では、弟子たちが父の名によって守られるよう祈られます。アビ・アドは、命を賜物として受け取り、感謝と誠実さをもって生きるよう招きます。

IV. サル・シャローム — 平和の君

「サル」は指導者、君、支配者を意味し、「シャローム」は単に戦争がない状態を超えています。そこには健やかさ、全き状態、安全、回復された関係、正しく整えられた生活が含まれます。したがってサル・シャロームは「平和の君」と訳すことができます。

多くのものを持っていても、心の平和を失うことがあります。充満とは問題が一つもないことではなく、人生が全体を結び合わせる善へ向けられていることです。聖書において平和は、正義、真理、和解、神への忠実さと結びついています。他者の苦しみに目を閉じる平和は、完全なシャロームではありません。

ヨハネ14章27節で、イエスはご自分の平和を弟子たちに与えます。それは葛藤や苦しみが直ちに消えるという意味ではありません。弟子たちは困難に直面し続けますが、希望なしにそれを担う必要はありません。キリストの平和は、回心、赦し、正義、他者への責任を通して目に見えるものとなります。サル・シャロームは、家庭、教会、社会、世界で平和をつくる者となるよう招きます。

V. 四つの称号が示す一つの存在論的全体

四つの称号は、互いに補い合う四つの次元として黙想できます。ペレ・ヨエツ — 知恵を必要とする神秘としての存在。エル・ギボール — 勇気と奉仕を求める存在。アビ・アド — 愛によって支えられる賜物としての存在。サル・シャローム — 全き状態と交わりへ向かう存在です。

知恵は行動を照らします。力は奉仕の中で意味を見いだします。命が賜物であるとの自覚は、感謝と忠実さを育てます。平和は真理、愛、正義を通して人生を一つに結びます。この枠組みは神を四つに分けるものではなく、メシアの称号が人間の歩みをどのように照らすかを考えるための黙想です。

VI. キリストと存在への問い

ヨハネ1章1節は、初めに言があったと告げ、14節は、その言が肉となったと述べます。キリスト教の信仰にとって、受肉とは神の言葉が人間の歴史に入られたことです。キリストは人間の生活に入り、友情、悲しみ、拒絶、苦しみ、死を経験されました。同時に、神の国を告げ、罪を赦し、新しい命への希望を示されました。

聖なる名は現実を支配するための公式ではありません。神を知り、真理によって生き方を形づくるよう招くものです。信仰の歩みには、祈り、回心、具体的な行い、そして新たにされる忠実さが必要です。

結び — 神秘からシャロームへ

知識には限界があるため知恵が必要です。不確かな人生には勇気が必要です。存在は関係の中で営まれるため、忠実な愛が必要です。そして、分裂した生活には回復が必要であるため、平和が必要です。キリストの光のもとで、「私は存在するのか」という存在論的な問いは、「存在を賜物として受け取った私は、どのように生きるべきか」という実存的な問いへと深まります。

ペレ・ヨエツは真理を求めるよう招きます。エル・ギボールは善を行う勇気を強めます。アビ・アドは命が賜物であることを思い起こさせます。サル・シャロームは愛、正義、赦し、和解によって平和を築くよう導きます。賜物として受け取った存在は愛の中で責任を見いだし、愛はシャロームという具体的な実りを結びます。

ペレ・ヨエツ — 道を照らす知恵。エル・ギボール — 仕える力。アビ・アド — 命を支える愛。サル・シャローム — 回復をもたらす平和。

Ad maiorem Dei gloriam — より大いなる神の栄光のために。

聖書・哲学参考文献

聖書：イザヤ書9章5–6節、詩編119編105節、ヨハネ1章1–14節、ヨハネ14章6・27節、ヨハネ17章3・11節、コリントの信徒への手紙二12章9節。

哲学：セーレン・キェルケゴール『恐れとおののき』（信仰と個人の実存）、ガブリエル・マルセル『ホモ・ヴィアトル』（希望、忠実さ、人間の旅路）、マルティン・ハイデガー『存在と時間』（存在と有限性）、エマニュエル・レヴィナス『全体性と無限』（他者への責任）。

注：イザヤ書の節番号は聖書の伝統によって異なります。本稿は黙想的考察であり、聖書解釈やカトリック教会の公式教説に代わるものではありません。